No.13
July 31, 1990

EAJ Information

特別講演

1989年10月12日(木)・臨時総会(大阪・建設交流館)

講師・題目

河野卓男：　関西文化学術研究都市づくりの生い立ちと将来像

日本工学アカデミー
THE ENGINEERING ACADEMY OF JAPAN

関西文化学術研究都市づくりの生い立ちと将来像

河野卓男（コウノタクオ）

大正7年（1918）4月20日京都府舞鶴市生まれ
昭和17年9月　京都大学法学部卒業
昭和17年10月　日本興業銀行入行
昭和19年5月　軍需省入省
昭和23年9月　商工省退職
昭和24年3月　ムーンバット株式会社入社
昭和36年1月　代表取締役社長
平成元年6月　代表取締役会長（現在）
公職
昭和37年9月　京都ファッション産業団地組合代表理事（現在）
昭和43―53年　日本洋傘振興協議会会長
昭和51―56年　㈳京都経済同友会代表幹事
昭和52年4月　京都商工会議所常議員（現在）
（現在、地域開発委員会委員長）
昭和53年5月　㈳関西経済連合会常任理事（現在）
（現在、学研都市委員会副委員長）
昭和59年10月　㈶国際高等研究所専務理事（現在）
昭和60年12月　関西文化学術研究都市建設推進協議会委員（現在）
昭和61年7月　㈶関西文化学術研究都市推進機構企画委員（現在）
昭和50年　監綬褒章受章
著書　「シベリア抑留記」（原書房）
「日本の土壌条件」
「日本人のバランス感覚」

司　会　臨時総会の特別講演に入ります。私、司会の小堀でございます。演題は「関西文化学術研究都市づくりの生い立ちと将来像」で、講師は財団法人国際高等研究所専務理事の河野卓男さんにお話しいただくことになっております。

ご存じの方も多いと思いますが、河野さんの略歴をご紹介いたしますと、河野さんは京都大学の法学部をご卒業になり、ムーンバット㈱を経て、現在は会長をなさっておられます。

昭和54年の初めころから、京都の財界はもとより、関西経済連合会の常任理事、関西文化学術研究都市建設推進協議会や推進機構でご活躍をなさっておられ、この演題でお話しする一番ふさわしい方と存じ上げております。河野さんからいただいた演題の案は「関西文化学術研究都市づくり――(1)生い立ち、(2)将来像」とありましたが、私が勝手にくっつけてしまい、大変失礼いたしました。

それでは河野先生よろしくお願いいたします。

河　野　きょうは小堀先生のお招きで皆様にお話しをさせていただくわけですが、学者の皆様ばかりで、私もいささか緊張しております。そこで「生い立ち」とありますが、ぶち明けて裏話――それもおもしろおかしく、今まで辿り着いたことを眺め、皆様にご披露し、ご理解を賜ると、そこに見えない魂をつかんでいただけるのではないかと思い、そのようなお話しをさせていただけたらありがたいと思っております。

ご存じのように小堀先生は、国際高等研究所の建設検討委員会のチェアマンをやっていただき、企画委員の学者先生方の、ある意味では気ままな注文に振り回され続けられ、2年ちょっと経てやっと案がまとまり、その間非常にご苦労をかけました。いずれにしてもこれからもいろいろなハードルがあるんじゃないかと思いますが、皆様のお力添えをいただきたいと思い、最初の萌芽期のことを皆様にご披露したいと思います。

ご承知のように学園紛争があり、特に京都大学は全共闘の牙城になって荒れました。それを収拾なさったのが高等研の現理事長の奥田先生で、医学部長をやっていた岡本先生を引っ張り込み、これを学生部長にし、この二人のコンビで京都大学の一番過烈な、あの学園紛争の衝に当たった。お二人ともこの経験がその後の奥田先生の行動を見てもインパクトを与えたのではないか、と思っています。

というのは、私は蜷川府政並びに京都も革新市政になり、我々外野から見ていて、京大の卒業生として京都大学はまさに大坂城と同じになった。落城寸前だ。外堀も内堀も埋められ、自由な研究ができず、あらゆる先兵が京都大学の中に入り込んできた。なんとか外堀を取っていかなあかん。こういうことを総長をやめられた奥田先生、それに岡本先生……先生は私の同郷の先輩でして、中学も高等学校も一緒で、一緒に下宿し、お互いに肺病でしばらく一緒に行を共にした経験がある。それで非常に親しくというか、なんでも厚かましくものを言うてきました。

そこで、蜷川さんになんとか辞めてもらうには、もう奥田先生以外にないんだと、3年間私は奥田先生に張りついた。そうして政治秘書となってあらゆる情報を入れ、なんとか……とその機を窺っていたんですが、最後の最後に「もうこらえてくれ」と言われた。私は、あらゆる条件をつくりましたが、先生は出ずじまいでした。

そういうことがあって、51年の7月に私のところに来られ、「実は河野、力になってくれよ」と言われた。「何しはりまんねん？」と聞いたら、奥田先生はささやかな表現で、「今度は本気でやる。お前にも迷惑かけた。自分は農学部出身だが、南の農業関係を強化するために、先進の京大の農業技術などを生かした試験農場をつくり、そこへ後進国の農業関係の技術者を呼び、いろいろ教えて帰らせるようなことをやりたい。その土地を物色しているが、京阪奈のところにある祝園火薬庫の150万坪、あそこを狙って防衛庁に行くと、玄関払いをくったんや」という話でした。

そのころ岡本先生は総長になっておられました。当時は石油ショック後で、琵琶湖総合開発で工場誘致論がとん挫し、新しく出ていた武村知事――これはなかなか優秀な人ですが、日参のごとく京都大学に通い、「土地も何もすべて準備する。京都大学の工学部を主に、ひとつ京大関係の研究所でも学部でもいい、来てほしい」というわけです。京都大学の工学部もだいぶそっちに動いておられたような形跡がありました。そこで、「奥田先生、そんな農事試験場だけでなしに、京都大学も含めもっと大きく何かやる。京大も満パイだから、新しくつくる学部とか研究所を新しいところにつくられたらどうですか。それから、阪大も入れてやったらどうですか」と言った。奥田先生は「そらまぁそれができたら一番ええねゃけども」……と。こういうことから事が始まったわけです。それが51年の7月でした。

そこで、奥田先生は学者ですから、学者のOBに呼ばっていこう。現職は、学園紛争が終えんしたところで、とてもじゃないが大学内の先生方の本音は、「やっと静まり返って、これで停年まで5年。研究に没頭したいんや。そんなお前、外のことなんかとてもじゃない」……という状況でした。それに現職の総長は動けないから、岡本先生もそういうポーズは絶対見せない。けれども、「知恵だけは出すわ」ということになったわけで、これが始まりです。

私は奥田先生に、「先生、すぐに動きなされ。私は経済界に火をつけます」と言いました。奥田先生は早速行動されまして、阪大の元総長、あるいはまた奈良の某大学の学長をなさっておられる方に火をつけられた。そうして学者のOBで奥田コミッティをおつくりになったわけです。

私は、こういう大きなプロジェクトは滋賀県ではムリだ，相当な金が要る。やはり、大阪の財界をまず引っ張り込まないとダメだと考えた。それに私も前から京阪奈には関心がありました。というのは、私は経済同友会にいましたが、当時、今の東京中心と同じように大阪を中心のインフラ整備論がささやかれていた。そうして内陸圏の京滋奈はほったらかしであった。ところが、京都は生産軸線上にあり、関西というか近畿のタテに流れているのが昔からの日本の文化軸と、こういうことで文化軸論をぶった。これには京大の天野君あ

たりにも非常に知恵を貸していただいたんです。実は文化軸と生産軸の交点が京都なんです。だから、京都は日本が豊かになってきて、文化を憧れマイカーがウロウロし初め、それが全部交通公害になってきた。ところが何のインフラ整備もできてない。京都から奈良に行くに5時間もかかる。道が1本でしょう。「そんなバカな話あるか」というわけで、それを直させるには、相当理論的に説得力のあるものをつくらないかんと、タテ軸文化軸論——日本固有文化軸論を打ち出し、この文化軸の周辺整備をやらんと何もかもムチャクチャになると唱え始めた。それが昭和48年です。

その前に、私は学生時代から地勢学とか人文学が好きだった。それで京都の地勢を眺めると、ご承知のようにヒョウタン型になっています。そしてヒョウタンの上のところだけに人がいるわけです。南は大海原なんです。4河川が全部合流した巨椋池という大きな大水ガメの海だった。それが私の生まれた大正7年から、日本で最初の大干拓が開始され、昭和16年、大東亜戦争の年に完全に終わっているんです。ところが戦後、京都の地勢を考え、京都の町づくりを考えるとき、あれが全然視野に入っておらなんだ。「これはおかしいじゃないか」……というわけです。ちょうどこれに火をつけたのが昭和36年です。その一つの刺激になったのが、ローマ大学のニューローマを設計した先生が、昭和34年に京都に来ているんです。そしてニューローマをつくったその経緯をお話しになった。それが私にヒントになりました。私は爾来ずっと南進論をぶって、京都の市内の保存は百年もかかるだろう。その間に経済が活性化しないのでは、京都は食っていけない。だから経済基盤を思い切って南の巨椋池に展開すべしとやった。そして「先兵としてオレは行く」とつくったのが、昭和45年、城南宮の南に京都繊維産業団地で、これが南部開発の先兵の仕事です。京都市は行政フォローをしてくれ、自前の金で全部やるから……と、やりかけた。

ところが、それはなかなか遅々として進まなかった。ということは京都では、ご承知のように蜷川府政、それに革改の船橋市政が経済とか、経済の活性化という議論に耳を貸さないような風潮であった。それに京都市民も、経済を言うと「経済は悪なり」と言われるからよう言わん。そこへ京都人の長い間の意識の中に、やっぱり文化・芸術・学問を三種の神器としてあがめ、経済は二の次にする。経済を口でいうのははしたないとする気風がある。そういうことが洛南の団地で苦労し、孤軍奮闘している間に私に見えてきた。

「なるほど、京都人は経済の活性化のために南を」と言うたって聞こえんなぁ。それに京都市民の意識は全部北面しています。文化・芸術・学問の集積は、全部が全部、京都のヒョウタンの上半分のさらに上にある。それが清水から始まって京都大学、御所……とある。だから京都市民の意識は「カミ・シモ(上・下)」でこれが千年の間ひとつも直っていない。だから、常に大阪とケンカして、「大阪は我々のションベンを飲んどるんだ」と言う。(笑い)。すると大阪は経済力を持っているから、「ナニッ、この野郎」ということになる。だから、京都人の意識は、大阪と1時間のところにあるんだが、本当の意識は静岡から浜松のあたりで、すなわち、都の京都、次の都としての東京……これは「東京に持っていかれた」とよく言うこの意識、それがひとつも直っておらん。だから、片目だけ開けて片目開けてない。だから、非常に変則になっている。この性根を直さなあかん。それが私の思いついたことでした。

ちょうどそのとき、たまたま奥田先生がその問題を持ってこられた。文化・芸術・学問か,「文化と芸術」となるとなかなか難しい。経済でそれを考えるとイノベーションである。イノベーションを応用化することは、関西は中小企業が多いから、これは益する。「うん、確かに学問・研究や」となって、それやったら先生、私、乗りますわということになった。それには京阪奈がよろしい。すなわち,巨椋池のかなたにあるのが京阪奈丘陵でしょう。

蜷川知事は、ここを泉南とか箕面にベッドタウンがつくられたと同じような時期に、そこを大阪のベットタウンにしようとして、ほとんど大阪のデベロッパー並びに日本住宅整備公団が用地を買いまくっておったわけです。それを蜷川さんは凍結したわけです。というのは、中央に対してぜっ

たい蜷川さんは頭を下げたくない。ベットタウンができて、後の公共的な学校づくりとか下水道づくりとなると、みな府の財力でやらないかん。そんなもんとてもできん。だからやめや、凍結だと言うて凍結したんです。後、にっちもさっちもいかん。

それを知っていましたから、それを一挙に風穴を開けたらええなぁ……というわけです。奥田先生は祝園火薬庫を狙われたんです。けど、あんなもの狙うヤツはないから、あれは楽しみに残しておきましょう。最後の最後まで残しておこう。そしてあれを取り巻きましょう。周辺には民間のデベロッパーがみな土地を買って困っている。このわざわいを福に転換しましょうと言った。

そうして、蜷川さんに気取られると邪魔される……というのは、万博のときに蜷川さんは、財界主導の万博には一切協力せんということでした。そのため今の計算でいうと何兆円の公共投資をフイにしました。そんだけ京都は遅れた。そういうことでまた経済界が動いたとなると、必ず万博の二の舞いになる。だから、密かに、新聞にも気取られんような潜行活動をせないかん。それにこれは京都の商工会議所ではあかん。やっぱり関経連が中心になってもらうことであると思いました。

当時の関経連の会長は芦原さんです。私は芦原さんに面識がないので、たまたま私の次女が住友の男と結婚しました。今、これが社長をしてますが、そのときの結婚の仲人も披露宴のお客さんも、当時の住友の頭取以下常務以上が全部集まっていただいた。私は結婚披露宴が終わって、すぐに住友の要路を富美代に連れていきまして、そして奥田先生と岡本先生と僕と、当時の国際会議場の館長をやっていた後宮さんを引っ張っていき、そうして奥田先生から学園都市の話をさせ、「ついては関経連に動いてもらいたい。しかし、芦原さんには私が面識ない。芦原さんを動かせるのは堀田さん以外にないから、堀田さんに、頼んでほしい」と、当時の伊部頭取と波多野・磯田両副頭取に頼んだのです。

早速、伊部さんやら今のグランドホテルの社長をやっている波多野さんが、わかったと、すぐ堀田に言うとなった。堀田さんもすぐに動いて、芦原さんに言うていただいた。当時すでにもう三木内閣から福田内閣になっていました。「明日にでも福田のところに行く」となった。「いや、ちょっと待ってください」――というのは、蜷川さんに気取られるとまた、「財界主導や、あかん」と言いよる。だから静かに、もうちょっと黙っておいてくださいと、止めました。

そんなようにしている間に、今度は日向さんに変わるんです。したがって、福田さんも田中さんに先を越され、非常に不遇なとき、大徳寺の立花大亀さんと非常に親しいものだから、ちょいちょい京都にお見えになっとった。私も慰めたり、あの人をいろいろ精神的にバックアップしておったものですから、「お前が言うとった学園都市、早う陳情に来んかい」と言われましたけど、「イヤ、京都が行ったらあかんのです。やっぱり大阪を立て、大阪に行ってもらいまひょ」、「もうしばらく、もうしばらく」……と、蜷川さんも健在でしたからそこで辛抱してもろた。

明くる52年の6月には、一番遅れておった南山城の総合開発――この答申を出すチェアマンは西山夘三先生です。それに間に合うようにせないかん。それからはずされたらまたぞろえらいことになる。そこで西山先生に奥田先生が会いまして、そこで「学術都市といった研究機能の設置を期待する」という文言を入れていただいた。――これで一つのハードルを越えた。

今度は蜷川さんに奥田先生を会わそうとするんですが、蜷川さんは、「ワシを狙うとるのは奥田や」という意識があるもので、なかなか会ってくれない。そうして、すったもんだの末、蜷川さんの子分みたいに可愛がられていたゼミの生徒がある。それが京都銀行の頭取である栗林さんです。彼に「あんた、すまんけど何とか橋渡して下さい」と頼み、蜷川さんも「そんなら会おうか」と会ったのが52年も暮れです。そして蜷川さんは、「うん、それはええこっちゃ。そやけどワシは中央へは陳情しに行かへんで、動かへんで。」と、そういう状況だったんです。それでも「よいこっちゃ」までは言うてくれたんで、京都新聞に頼んで、その「よいこっちゃ」をバーッと書いて、既成事実をつくったんです。(笑い)

いよいよ明くる年の53年、この年の知事選挙で、「これで蜷川さんに降りてもらおう」という戦略が始まった。実はその1年前の52年1月に、前尾繁三郎さんがボクを呼んで、「オイ、河野。オレはどうしても死ぬまでに蜷川をおろさんといかん。これはワシの責任や。おまえ、力貸せ。」って言うんで、「どうしまんねんや」と聞いたら、「現職やけど、岡本総長をくどいてくれ」と言うんです。「そんなバカな。京大がこれから南に移転するとか，学園都市をつくろうとする時、やはり、京大が中心になっているのに、そんなことしたらえらいこっちゃ。おことわりします」と、そのときは取り合わなかった。というのは、竹村問題が未解決でまだ残っていたんです。そこでそういうことがあることを理由に断ったんです。ところが、その年の7月、前尾さんがどうしても会いたいと言うんであった。すると、「どうしても何とか考えてくれや」ということでした。竹村問題も一度は消えた形になっていたし、それが一応解決したから岡本先生を口説きましょうか。

しかし、これは現職の総長やから、そう簡単にいきません。「もしもあかなんだら前尾さん、あんた出ますか。」と言うたが、「イヤ、ワシは年やし、もうそれはあかん」というわけです。「ほんならどうしまんねん」と聞くと「お前にだけ言うとくわ、林田を引っ張り下ろす。」というわけです。そのころ林田さんは、大平さんの子分で、参議院の政策審議会長をしてました。前尾さんは、「ゼッタイ言うなよ、京都の経済界の誰にも言わんといてくれ。これはお前だけやぞ、約束やぞ」……ということで、それなら話はわかった、セットで行こうということでんな、「わかった」ということで、林田さんにも黙って岡本先生への口説きをやりかけたわけです。

ところが、竹村問題が夏休みになって有志教官の居座りの形で再浮上してきたから、岡本先生は「そんなら1期でやめようか」なんて言う、非常にフラフラしていたんですが、竹村問題で、「あの収拾は岡本の独走だ」と有志教官が騒ぐものですから、その決着をつけるため、どうしても総長2選に出て、それに勝ったら決着だとなり、出んならん仕儀になり、出たわけです。そうすると受けんならんし、そこからまた説得が最初から始まる……と、もういろいろ苦労しました。ところが、結局は、京大内部の評議員会が半分でもオーケーしてくれたらオレは出ると言ってくれたのですが、一人と言わず全部の猛反対で、デッドロックになっちゃった。そこで、前尾さんに、「もうこれで終わった。とにかく林田に」……ということで、今度は林田さんを呼び出しに行ったら、今度は林田さんが入院してしまった。当時は太平さんが幹事長で、選挙に負けていた。非常に数が少ないから猛反対してどうしても聞かない。

このときにも私は堀田さんに頼みました。堀田さんは大平さんと親戚になる。というのは大正製薬の上原さんへ堀田さんの次男坊が行って、上原さんとこの娘を大平さんのムスコが貰うとるんですよ。堀田さんは、「よし、わかった。前尾はあのとおり体を悪うして総理になれなかった。だけど、池田から“ワシが死んだら前尾を頼む”と、こんこんと頼まれてる。大平頼むとは一つも言うとらん。だから、これは未知数や。前尾を犬死にさすわけにいかん。ワシが行く」と堀田さんに行っていただいた。大平の後ろから大平を押し、前からは前尾さんと野中さんが必死――もう、辞表を懐に入れてかけ合うた。それで「林田出ろ」となりました。結局、岡本総長は出ずで、林田さんが出て、結果はあのとおり大勝して、選挙戦は初めから「京阪奈の学園都市実現」をスローガンにしたんです。

これは政治史に残ると思っているんです。というのは、あのころ自民党は非常にびびっていまして、裏へ隠れ、主導権を公明党に取らせていました。そやから矢野君が一番いきっとったときです。そして自民党が隠れ、対抗馬だった元副知事で社会党の山田さんを社公民が押し、それでやって公明が実を握ると言っていた。そして大阪の知事選も東京の知事選も全部そのパターンでいく筋書でした。ところが、林田で自民党が勝てたものだから、大阪も東京も選挙パターンが変わったんです。これは政治史に一つのエポックを来した選挙だったと思っています。

自民党は「でかした、でかした」と喜んで、よう今まで京都市民を泣かしてきたな……というお

返しに、学園都市に国土庁の予算をすぐにつけてあげるとなったわけです。

さて、喜んでやりかけて、「さぁ、これで新聞も解禁や」と思ったら、新聞が一つも書かん。そこでいろいろ調べてみると、箕面の梅棹君の発言が相当新聞社に響いていたんです。「あんなもんでけへんでぇ」ってね。あんなやり方して、ハイテクタウンやなんて、何の意味があるか……という梅棹君なりの意見だったんです。ハイテクタウンなんてどこのローカルにもできる。京阪奈は「文化」を入れなあかんのに、それが入っとらへん。あんなもんでけへんでぇ……と言うとったから、朝日を初めとする新聞がよう書かんわけです。

「これはあかん」と梅棹君に、「ぜひとも奥田先生と岡本先生に会うてくれ」と、三者会談を私も入ってやりました。その第一回目はもの別れ――「あんなもんでけん」とね。ところが、しばらくしてると状況が変わってきた。というのは、大平内閣になって“田園都市構想”が出てきて、それの理念づけが梅棹君で、文化センターづくりによって若者を定着せしめるとなった。そういうことのチェアマンになった。すると、箕面ではちょっと偏っているんで、梅棹君が「ワシも京阪奈に並ぶわ」となって、最初は「関西学術研究都市」と言うとったが、文化を入れようとなり、梅棹君に「それやったら、とにかく林田知事に助言してやってくれ」となり、林田知事と会うて「文化学術研究都市」という色塗りになって、梅棹君も乗ってきたんです。

そのようにやりかけたんですが、ご承知のように国土庁で予算がついたのは大都市圏局です。ところが、国土庁には官僚のナワ張りがあった。梅棹氏は後に田園都市構想を出すんですが、その予算はどこについてるかというと、いわゆる大都市圏局やなしに国土庁も企画調整局についてるんです。――今度は国土庁の中で仲間割れで、「後発が何言うとるか」……と、すったもんだがあって、なかなか梅棹君のいうのが表に浮上しないんです。そういうことはありましたが、林田氏の決断で「文学学術研究都市」という形にしていった。

この運動の中で正しかったこと――これは今でも私はそうだと思っているんですが、「やっぱり民間の活力でやる」ということです。ご承知のように、あのころは石油ショックのあとで、政府はお金もない。したがって、これは民間のエネルギーでやっていかないかん。官に余りおんぶしてはいかん。なし崩し的ナショナルプロジェクトにすべきである。一番最後にナショナルプロジェクトに辿り着くのである。最初からナショナルプロジェクトにして、官が全部押さえ込んだらこんなもんあかん……と。

そういうような意識でやっとったんですが、日向さんがあのとおりのエネルギーで、いわゆる関西空港で神戸とモメてました。私、同友会の代表幹事をやっていて、神戸の代表幹事と結託して、そのカベを破ってあげました。そうしてあの推進協ができて一挙に浮上した。そのかわり私は、「取引ですよ。内陸圏と空港問題では空港がハードだ。我々の内陸はソフトなんだ。これとのやりとりです。私らが協力したから今度は学園都市をやってもらわんと困りますよ」と、こう言うた。だいぶ待たされたんですが、空港に決着がついたら、日向さん、ああいう人ですから、陳情に行って私が口をはさむものだから、「オマエ黙っとれ！」って、よく叱られたものですわ。その日向さんが、「よし、これで空港がスタートした。今度は学園都市や」と言い、実際に、本当に動いてくれました。そして、中曽根さんのところへ「早くナショナルプロジェクトに」とやった。中曽根さんは、「学園都市のイメージがひとつも見えんから、見えるようにしてちょうだいよ」って言ってました。

ところが、これをどうして実現するかというと、関西にそういう大きなデベロップのキーポイントになるヤツがおらん。日向さんも「これからどうしようか」と言うから、そらやっぱり梅棹さんも言う下河辺さんがよろしいやろう……と、彼をチェアマンにするつもりやったけど、ニラ（総合研究開発機構）の方が手を放せん。けど、「お手伝いはしよう」と下河辺さんにも入ってもろうて、それで理念づけをしてもらったんです。それがいわゆる関西文化首都圏で、京阪奈がその核となるということです。いわゆる文化立国論を立て、それに梅棹君などの知恵も入ったわけです。

そういうことで一つの形ができてきて、これな

ら話がわかると、中曽根氏が相当主導権をとってくれ、「よっしゃ」というわけで、非常に遅れたですが、ナショナルプロジェクトとして、議員立法となったんです。だから、日本の戦後の議員立法として、国会で「文化」がこれだけ大きく政治の場で位置づけられたのはこれが初めてです。それだけ遅れたけれども、「生産立国はある程度軌道に乗った。次は文化立国や」という形になって、やっと辿り着いたというわけです。

そういうような経緯があって、確かに京阪奈はご承知のようにディベロープの人が、いわゆる日本住宅整備公団を入れ、あらゆる民間ディベロッパーが蜷川さん時代に押さえつけられ、困っておった。しかし、私はこの点だけは、「トラさん死んで皮残した。それもよい皮残してくれた。これは蜷川さんの置き土産やと思います」——あれが単なるベットタウンにならなかった。関西の活力源、文化の一つの峰をつくる契機をつくってくれた。こう心からほめているんです、蜷川さんはキライですがね。(笑い)

それにあそこは、ご承知のように歴史的に見て、一番最初は大和路でメインロードであった。ところが、皆さんもご承知かもわかりませんが、朝鮮半島で新羅と百済の戦いがあった。それがそのまま日本にきて、最初は百済勢力一辺倒だった日本の関西エリアに新羅が入ってくるんです。そのときの戦いの主戦場があそこです。ここに祝園火薬庫といって、霞が関と同じだけの防衛庁の敷地があるんです。

祝園（ホウゾノ）って書くんですが、これは倒れた人たちを全部祭ったところなんです。だから、葬る園の（ホウゾノ）」が正しいんです。だから、非常に忌みな土地なんです。それだからこそ残っていたんです。大阪の人もここを見て見んフリをする。京都の人も北向いて、南を見向きもせん。奈良も吉野の方ばっかり見て、ここへは尻をむけていた。そして約千年の間、忌みな土地として手つけられなかった。それを学園都市で火をつけたことで清めたんです。そう私は思っています。だから、地元の人は本当に心から喜んでいます。葬る園——敵味方の別なく、「これから戦をせんように」と祈願してきたのが祝園神社でして、今は祝う園の祝園」になっていますが本当は「葬園」なんです。主戦場だったんです。ですから地元は、こういう計画があると反対するんですが、全く反対せん。「やっと待ちに待った」「日が当たってきた」と喜んでいます。

そういう土地だけにディベロッパーも長い間塩漬けにしてた。その土地——これ、もしあんなとこが農地だったら私は火つけませんよ。大手のディベロッパーが持っといてくれたから、それを出させることにして火をつけたんです。大手のディベロッパーはオカシイことできませんものな、メンツあるから。したがって、これ幸いに、それをトリコにしたんです。彼らは待ちに待って「いよいよ自由にベッドタウンができる」……と思っていたら、「学園都市機能にこれだけはせないかんぞ」と規制やられたわけです。しかし、今から考えたら、それによってイメージアップしていますから、そのぐらいの犠牲を払っても、地価で十分ペイしています。

そういうことですが、私はあそこに1坪の土地も買っていません。買ったらモノが言えなくなる。それだけでなく、買ってたら必ずそれを誰かがあばく、何しろ初めからタッチしていますからね。だから、「お前はアホや、商売人と違う」と言われるんですが、「そう、オレは商売人じゃない」と。このような大きなことをやるのに、自分の私利がちょっとでも動いたら、もう大きな声を張り上げられませんからね。だから、私が言うことには、地元の共産党も一つもよう反対しませんでした。そうしてやっと形が出てきたわけです。

もう一つは、そのように学園紛争から始まって、“新しいフロンティア”が命題になっていますが、前尾さんは最くから国会図書館の問題があって、あそこへ第二国会図書館を……と、早くから黙ってやってくれました。だから、それも決定し、これが情報発信・受信のセンターができます。「情報」にもそれが非常に機能する。さらには、奥田先生がチェアマンになっている国際高等研究所、これが本当に基礎の基礎をやっていこうというようなことで、今その建設段階の直前にあります。

この国際高等研究所については、林田知事に「土地をくれ」と言ったら、「それは議会が承知しない」

と言う。「それやったら、永久貸与でどうや、ちょっとずつだけ地代を払うから」「あぁ、それやったらできる」と、喜んで彼はやってくれました。ですから、最小限度の用地はあるわけです。それに建物――峰を建てんならん。これには小堀先生に非常なご苦労を願い、学者の意見も聞いたりして最終案ができた。

ところが、これをやるにお金を集めんならん。そこで日向さんを中心に、その後、私と永泳部で一緒やった1級上の宇野さんが、関経連の学園都市担当になってくれた。これで非常にスムーズにツーツーで行くようになりました。日向さんの後、宇野氏が関経連の会長になって、いまだにここに最重点を置いて、次々と布石をしていただいた。お金も40億用取りあえず集めようということになり、これも40億円を越えました。

これは、すぐに企業にプラスになることより、もっと多くのことをやろう……というわけです。本当の学者の研究メッカにしようというわけです。だから、企業には何にもメリットあらへんやないかとか、もう、いろいろ議論をされましたが、ようお金を出していただきましたよ。それはそうやけど、「いつまでも企業におんぶしてるのはおかしい」と、企業からある程度お金をいただいた段階で、私は次の手を打ったんです。これは最初から考えておったんですが、企業が儲けている。そこへお金をもらう……ということで、あらゆる寄付が全部企業に行く。これは企業もたまったものやない。――こんなんはおかしいと思うんです。

確かに、企業が最初に富んだけれども、いまや個人も富んでいます。オーナー経営者はもちろん、知らん間に土地が値上がりして、不労所得みたいに先祖からもらって持っていた土地がバケたりして、もう湧いてきている。それなのにあくまで全部企業に寄付……では片手落ちや。このように未来研究をやるようなものであればあるほど、全国民にこれを知らしめて、国民の中の個人の資産家に、少しずつでももらおうやないかと、こういうことで個人ボランティアを募ろう。それが冠基金です。

今まで日本の風潮としては、個人から金をもらうと、できるだけ名前を消すのをよしとしていたんだけど、そうじゃなしに、その人を顕彰しましょう。あくまでその人が寄付してくれたと、名前を積極的に残そう。このように新しいことをやるのに、個人であろうと企業であろうと、その名前を永久に残し、顕彰する。そのような発想に転換せなあかんと言うて、“冠個人ボランティア基金委員会”をつくり、いよいよこれを積極的に展開しようと思っているわけです。

しかし、これも我々の高等研だけの仕事としてはムリです。そこで新聞を入れました。新聞の全国紙に「新聞も世の中を批判しているだけやなしに、よいことをするのに積極的にアンタの武器を使って協力してほしい」と言うたら、「そらそうや。よし、手伝うぞ」と、全国紙が全部入ってくれそうです。最初は読売と朝日だけにしゃべっとったんですが、そんなことしてるうちに、「全国紙は全部いれろ」と、全国紙が7紙と地元京都新聞との8紙が、この個人ボランティア委員会に名をつらね世論に訴えるについて、応分の役割分担をしてもらうことになりました。

せんだって、世界高等研会議がありましたが、このとき朝日新聞が、「1銭も高等研から取らず、自前でやる。自分でスポンサー見つけてくるし、もしスポンサーが見つからなんだら朝日の責任においてやる」ということで、共同企画者に入っていただき、あのとおり世の中にアピールしてくれた。そのときのスポンサーは野村証券さんと武田薬品さんでしたかの2社でして、成功裏に世界高等研会議がこの間あったわけです。

ちょっと話がヨコそれますが、この間の世界高等研会議はプリンストン、それにドイツのベルリンとビルヘルトでしたか、フランスのパリ……ここは数学と物理でしたか、非常に特化した研究所が来てました。英国は来なかったけど、ブレンナーさんが来てました。そうしていろいろと討議が行われ、「日本の高等研に期待する」ということになって、非常によかったなと思っています。

そのときに出てきた討議の内容を私なりに分類すると、高等研会議で合意されたものの中で、一つは「哲学の領域を入れてくれ」ということがプリンストン大学から出ました。今までは、各論分化の方ばっかりいっていたけど、現在は総合的に

把握するために、どうしても哲学の分野が要る。哲学の分野を入れることにより、総合把握が可能になる。今そういう時代であると、こういうのが皆のコンセンサスでした。

それから、高等研がやろうとする命題が五つほどありましたが、その一つは、21世紀の社会システムを自然科学と人文科学、哲学、心理学まで入れ、両方でシュミレートしてみよう。どういうような社会システムになるかということです。もちろん、経済界ももちろんハイテクノロジーを知りたいが、各々その分野については、自己の研究所を持って担当自信を持っています。ところが、世の中がどう動くのや、社会のシステム、世界のシステムはどう動くのかが全然わかりませんし、見えません。それだけに「それはいいことや、それを知りたい」というのが出まして、これが一つのテーマになってきた。

それから、もう一つは科学の安全性です。これは地球環境汚染の問題からも何もかも含めて研究しようというわけです。この二つが大テーマなんです。そしてこちらの小さいテーマとして哲学の領域をつくれということです。そしてもう一つは、特に生命科学分野で実験が先行している。それをくくった理論化が遅れた。だから、どうしても理論化をやらんならん。これはブレンナーさんあたり、強い関心がありました。

そんなところが、この間の世界高等研会議の皆さんの合意でした。その中で日本の高等研に期待するのは、特にさっき申し上げたように、いわゆるヨーロッパ的なパラダイムと、もう一つは東洋的な発想、こういうものが一緒になって東西相互乗り入れをする。さらには南北の相互乗り入れです。だから、やるとなると、恐らく環太平洋の低開発国というか中進国などからも学者を入れ、一緒に合議すれば、世界にとってやりたいことがたくさんあり、それを日本がやってくれれば、みんな馳せ参ずるというわけで、非常に大きな収穫であろうかと思っています。

そのようにこの間の世界高等研会議は、それなりの大きな成果があったわけですが、それを実現するためには、早く研究の峰——学者村をつくらんならんし、それには金が要るというわけです。

そういうことはありますが、私は、今まで火をつけてきて、こういうことが最後に言えると思うんです。

私の感じでは、あの学園都市に火をつけたとき、まずこの間亡くなられた佐伯さんが、「お前、大きなこと考えとるが、できるやろか。私はあまり利害関係あるから動けんしな」と言われた。そこでボクは「やってみせる。動けんけれども、あんたは経団連の副会長やから、土光さんの金玉握っといてください。そして土光さんから“やれ、やれ”と言うてもらうようにしてください」と頼んだ。すると佐伯さんは、「ああ、それならできるわ」と手分けをしたわけです。私は経済同友会の代表幹事をやっとった。当時は都市周辺整備は後回しで、地方づくりの段階で、下河辺さんがそのころ国土庁次官でした。けど、学園都市は別だよ、これは全然別のプロジェクトやと言いまして、これに対して東京の経済同友会の佐々木直さんに非常な理解を示していただいた。それに今の三菱化成の鈴木さんが、「おう、それはいい。河野君、やれ、やれ」と非常に励ましてくれました。ここの生命科学の研究陣はすごいですからね。それに興銀時代の大先輩である中山素平さんにもそういうような応援をいただき、いろいろと手分けをしてやってきましたが、そのときに京都でも、「河野はまた大きなことやりよるわ。あいつ、雲つかむようなヤツや。何考えとんねん？」と、よくあざけられたものです。それに大阪でも、「そんなヌカみたいなこと言うて、“文化、文化”って言うとるけど、何言うとんねんや」……と。こういうのが初めでした。ところが、だんだん薬が効いてきまして、何かとやっているうちに、みながフワーッと乗ってきていただきました。

面白いもので、時代の流れがものすごい早いピッチで動いています。だから、私は、時の流れに逆らわんように、先取りして乗っとったら、必ずみんな気がつくときがくると思っていた。——そのとおりでした。やはり、最初は夢物語みたいに思い、「あいつキチガイとちがうか」言うてあざけられたものです。だけれども、あんがい早く時代の変化の方がこっちに近づいてくれました。そう思うほど時代の変化、人間の意識も、非常に早いピッ

チで動いていると思います。

それに、日本の場合「産・官・学」と言いましても、きょうの堺屋太一君じゃないけど、ドイツと組んで日本がやったあの総力戦のときの体制、あれが戦後もひとつも終わっとれへん。かえってますます強うなっとる。そやから、「東京一極集中をやめる」なんてなかなかできるものと違う。こう堺屋太一君は説きほぐしてましたが、確かにそうですね。そうして東京では現象面——現実だけを見る。関西は一歩距離を置いてその先を見る。そのことの手分けがやっぱり必要なんじゃないか。だから、私は政治の中心は東京におまかせや。ただし関西は経済・情報の中心で、新しい第二国会図書館の機能も含め、情報はもちろん発信せないかん。しかもそういう文化発信といったサイドから発信した方がよろしい。あるいはまた文化的な側面から見ていこう。それは決して経済にならんのじゃない。大いになるというわけです。もちろん、これは梅棹君の説です。

梅棹君は、人間の生物としての発展過程から言って、最初は消化器官、その次は筋肉、それから、脳や。つまり、消化器官——食べ物で農業の時代、そして次に新しい近代文明が出てきたのは、筋肉が動くときに相当する。したがって、そのアンチテーゼのマルクスの労働価値説まで出てきた。そしていよいよ脳の段階に入ってきた。ここでは価値はコストに関係ない。これはお寺のお布旋と一緒で、来た坊さんの格によると。このように彼は彼なりの白い議論をしています。そうして堺屋君はそれを知価社会時代と言うてます。

このように世の中が早いピッチで変わっていく。そういうときに関西の京阪奈丘陵のこれからの役割は、今考えているよりますます大きな役割を演ずる可能性がある。特に東西の接点・南北の接点として、海外の学者が全部期待している。自分らはそれができなかったけど、それをぜひやってほしい。我々もそこで一緒に議論をしたいのだと。こういうことで相当大きな期待と可能性が、この学園都市とその頭脳中枢となる高等研究所に寄せられている。これに応えるのにどうしようか……と、やはり、みんなが各々の分野で知恵を働かせてやるべきです。

特に日本は、堺屋君の話じゃないけど、日本のお上社会は徳川時代からひとつも変わっておらん。士農工商の武士が官僚になっただけですわ。そやから、高等研究所でも、科学技術庁から誘いがありました——「科学技術庁の頼むテーマをやってくれ。そうしたら3年間保証する。それも相当な金を保証する」と。そのときに企画委員の先生方がいろいろ議論されまして、「まだ成熟していない。未完のときにそんなもん受けたらあかん。断ろうやないか。」と、こう学者全部合意しまして、これはお断り申し上げました。とにかく日本はお上社会や。それに財団は文部省の所管ですが、文部省から一銭も金をもらってません。そのかわり井内さんに一生懸命これをサポートしていただきました。そうしてできるだけ権力を持たん学者、権力を持たん企業、権力を持たん市民が一緒になってこのアカデミアをつくっていく。それが世界から“エコノミックアニマル”といろいろなそねみを受けている日本、それを帳消しにしていく大きな役割が期待されているのではないか。こういうふうに思って我々もやっているわけです。21世紀のパラダイム発見場所として。

ご承知のように、今では火つけの段階を終わりまして、しかるべきポストの人が参入してやっていただいておりますが、途中から入ってきた人が、何もわからんとギャーギャーとやるものですから、ひょっとすると魂が抜けることがありますので、そういうときはボクがフリーランサーで、「これ間違うとるでぇ」って平気でその都度注文つけます。とにかく原点を忘れんと、何とかこれを次代のために完成に導きたいなと思って、日夜それなりに私もご協力申し上げている段階です。

こういうことで小堀先生いかがでしょうか。後は質問がありましたらお受けしますということで……。

小　堀　まだ1時間もたってないんですが、いろいろ裏話をお聞きしました。私も知らないことでした。政治的な流れの中でいろんな話が進捗したとか、専務理事をされている国際高等研究所自体、一つのアカデミーを目指しているわけで、我々の工学アカデミーをどうしていいかということと、共通の問題があるようにも思えるわけです。向坊

会長は帰られましたが、特に科学アカデミーができて、アメリカから……といってもアメリカに限らないですが、そういうところと強い接触ができて、植之原さんもご苦労なさっておられるようです。やはり、お金のないことがあらゆる活動の制約になっていて、お金をもらうところを間違えると、今度はそちらの方の制約がきつくなる。というようなことで、工学アカデミーも、これからどういう形で進んでいくか模索している……と、先ほど伺ったわけです。

そういうところに今の河野さんのお話しに接点があるように思います。そういった観点……もちろん、何でもよろしいわけですが、何かご質問なりご意見なりありましたらどうぞ。

植之原　今まで関西文化研究都市づくりを、離れた東京から聞いていて、わからないことが随分あったんですが、きょうの裏話を伺い、本当にすばらしいものができることに、強く期待しています。

この前の世界高等研会議で、文化と文明を一緒にして21世紀の姿を描くと、こういうことに相当力を入れるべきだという話になり、それは私どもが常日ごろから模索していて、ぜひ知りたいということですから、その成果が上がるような研究陣をつけていただきたいと思います。

ところで質問ですが、さっき個人からの寄付を受ける活動を展開するとおっしゃったが、冠もつけて差し上げるということ。冠をつけることは、個人にとって自分の名前を後世に残せるわけですから、非常にやりがいがある。もう一つ問題は“税”の問題です、寄付するときの税制上での優遇措置。これはケチな大蔵省どういうふうにご説得なさったんですか。(大笑い)

河　野　寄付に絡む問題ですが、今度私は自社株を20万株寄付すると発表しました。これは個人で持っているムーンバットの株ですが、時価で4億円ぐらいになりますかね。しかし、これは時価です。額面の50円株にしたら大したことないんです。

ところが、私が寄付しますと、時価相場で評価して何と恩典があるんです。というのは、私総合課税で所得税を払っているでしょう。それが少なくなる。払わんでもええかもわからん。いわゆる免税ですわ。それに分割すると2年いけるかもわかりません。つまり、段階的にして今年10万株、来年10万株を寄付すると、私が総合所得で払うべき金が免税になりますねん。

こんなん誰も知らへんのですわ。だからねぇ、そういうのを知ったら「へーっ。一ぺん税金払わんと、そんな気持ちになりたいなぁ」というリッチマン、幾らでもおりますよ（笑い）——そこまで恩典があるんです。

ご承知のように、個人の名前を出している財団——例えば松下さんとか稲盛さんのそれぞれの財団、これはあきまへんのや。あれだけ立派なことをやられておっても税金は要るんですわ。ところが、この財団は個人じゃないでしょう。一人でやるんじゃなくして、みんなの力、みんなの資財——企業からの、個人からの献金です。みんなでメジチ家の役割を果たすんです。国際高等研究所は何も個人名が入っておらんでしょう。これが政府にいいんですわ……「これは立派や」とね。これは学者にとってもアカデミアで、何も要らん。ただ全力投球ができる自分の場でしょう。それに個人や企業にとっては、「この企業からお金もらいました」と、ちゃんと顕彰します。だから、個人のみならず企業から約48億円もろてます。

例えばナショナルさんと関電さんからそれぞれ2億5千万円出していただいたが、全部名前を残します、「これはナショナル口座」「これは関電口座」とね。だから、会社が「今度100周年をする。この前ちょっと値切って少なかったけど、もう一ぺん放り込む」……といただいたとき、それが足されるような仕組みにします。

それから、もっと小さいお金……といっても、例えば京都あたりで学者が亡くなられると、「香奠を全部放り込みたいんやけど、どうやろ？」というのがあります。こういうのは「その他」の項目、というのは全部に名札をつけてというわけにいきませんが、そういうものもいただける。だから、3分類しようかと思っています。

個人で財団をつくっても、その永続性がなかなか大変です。お金があったらというても、そこに学者とか有識者が張りついて、活動してもらわんならん。その場合、「個人のためにやる」となると、やっぱり抵抗がありますわ、「何で個人のためにわ

しがフル投球をせんなんねん」とね。ところが、この財団は「自分らのアカデミア」という気持ちがあるから、これは全力投球していただける。

そら稲盛さんとか松下さんやったら、あれだけの資産家ですから一人でやれます。ところが、そこまでいかん方やったら、自分で一つの財団つくるというと、「あれは財産隠しや」と後指指されるのがオチです。ところが、これはメジチ家をみんなでやろうというわけですからね。もうこれは相当楽しみです。「自分一人ではやれんけど、ワン・オブ・ゼムでワシも入っとる。しかもワシの名前をちゃんと残してくれる」というわけですね。大きく出て500億相当を目指してます。

「そんなん言うけど、個人の醵金は難しいぞ」……とみな言わはりますけど、時代はそういう方向へ流れていると思うんです。ご承知のように、戦前、理化学研究所なんか、あれだけ立派な業績あげてますわ。現在の理化学研究所、それがみな個人や企業のボランティアで支えられる。それに「人類のために」「世界のために」というテーマ――実は戦前の立派な財団の目的を見ると、本当に立派なことがうたってあります。「国家のため」なんて書いてあらへん。みな「人類のため」とか「世界のため」です。それがあの間違った国家目的のナニでズタズタにされちゃった。日本はそういう太平洋戦争の苦い経験がありますし、あれで相当よい趣旨で発足したものがチャラになった。

そして戦後はみんな貧乏でした。ところが、まず企業が立ち上がった。京都でもお寺から何もかも、寄付は全部が企業です。個人の資産家はなんぼでもゴロゴロしているんです。そこを一つも呼ばわらへんわけです。これはおかしいんじゃないか。その個人の人たちはその人たちで、寄付したいかもしれません。ところが、お呼びがないんです。そして企業ばかりに行くから、「またかいな」「またかいな」……と、企業はもう大変ですわ(笑い)。

こんなのは少しアブノーマルだと思います。といっても、企業の窓口は閉鎖してないんです。最初は高等研でも49億円ほど集まっていますが、値切った人もあります。しかし、こんどは全部寄付名簿をおもてに出しますから、「あのときワシは値切って、マズかったな」(大笑い)……発表されたらカッコ悪いから、「よっしゃ、こんどはウチは100周年をやる、そのときポンと入れるわ」と、こういう窓口を開けているんです。そうしてそれらを一覧表にし顕彰していく。これが趣旨でして、私は時代に合うてると思うとるんです。

小　堀　先ほどの国際高等研究所の5周年のシンポジウムに海外から研究者が集まったわけですが、そのそれぞれの研究所が、その国でどういう形で資金面を賄っているか、ご披露いただけたらありがたいんですがね。

河　野　プリンストンの国際高等研究所は、立上りは一人でやっておられて、デパート屋さんですわ。自分のデパートをもうちょっと大きいデパートに売って、その資金でやられたのが始まりです。ベルリン研究所は、ドイツ政府から半分もろうておられます。そしてフォルクスワーゲンとかベンツとかからもろうておられる。それで「ベンツのために」とかそんな大概なことは言わさんのです。しかし、政府からもろてると、ドイツでも色々な行政介入があると言うてます。だから、できるだけ辛抱して、もらうなよと。自分らはもろうているけど、これをよしとしておらん。やっぱり自由な研究をこれからやらんならん。それには足カセ・手カセにならんよう、できたら自由な金・善意の金をもろうてやりなさい。これが反省も込めた助言でした。

それは正しかったと思うんです。さっき言いましたように、文部省所管になったが、最初はどこの所管にするかが問題だった。現職の大学の先生などが応援してもらわんならんから、文部省を抜きにするわけにいかん。といって、文部省も科学技術庁の両方ともやったら、ケンカして、どうもならんでしょう(笑い)……もう、いろいろなことがあって、文部省になったんです。

文部省のお金のないことはわかってます。文部省の学術研究費なんて、ここからワク取ったらえらいことですわ。だから、1銭ももらってません。もらってないが、あらゆる免税的なことについては、率先して交渉していただいている。それに中曽根さんははっきり言いましたよ。今、政府に金がない。民間の方が持っているやないか。政府に

は、金出さんでも、金にかかるいろいろのサポートができる。だから、青写真をピシッと見せてくれたら、「これは意味がある」となったら、政府は政府なりにいろいろなサポートをしますよと。つまり、免税措置とかいろいろあります。それでええと思うんですよ。

ところが、学者の先生方でも、早初の立ち上がりのときはフラフラして、みんなそこらがはっきりしとらなんだ。だから、立ち上がりをやって、ある程度文部省にゲタ預けるという意見が、あんがい平気で出ておった。奥田先生もそう言うてはった。「それ、先生、あきません」と言うた、ボクは。「これはあくまで民間の自由なもの。それに東京と違うて関西は、官からもらわないということ。一つの自由としてやるべきや」と。

それに、この間猪瀬先生がおつくりになった東大の中の先端科学技術研究センター，これと東京のシンポジウムは共催をやったんです。猪瀬先生にも我々の委員になっていただいていますが、あのセンターは、東大の中で政府の予算でやっておりながら独立で、民間の金ももらう。そのかわり条件づきやない。研究者も東大だけやなしに、いろんなところから入れて来られています。これは今までの延長線上での官学の新しい一つの方法だと思います。

しかし、こちらは、全新しいものを新しいとこにつくったわけで、阪大も京大も入ってくる。そうなると難しいところが出てくる。「そんなんやったら、もう京大や阪大やということなしに、ここだけの専従の学者を」……となると、これは固定する。そうすると年限がたつとあきません。だから、固定しないことを大原則に入れ、阪大や京大、それに神戸大学も、現職のままで文部省の了解を受けて来ていただいています。

そういうこともあるんで文部省所管にしましたが、文部省は十分サポートしてくれてます。それでいて「こうせぇ」と、かまいにはぜったい出ません。

いえねぇ、科学技術庁は非常なエサを持ってきましたよ。「これでどうや、５年間保証する」というわけです。これは大きな金額でした。何せ毎年２億円で10億円まで研究費を続ける。「これだけ出すからどうや、依頼研究をやってくれんか」と言うた。そのとき学者が、「これに手つけたらアカン」と皆さんが合意して、貧乏やけどガンバッテやろうとお決めになった。これがよかったと思います。この間の世界高等研も、そういう選択に対しては、むしろ、「それはよかったなぁ」とほめてくれてます。

大　饗　私、筑波に長いこと勤めていまして、筑波の都園都市ができる過程はつぶさに見てまいりました。それができたとき、かなりの中枢部におりましたから、いろんな裏話も、聞かれればできると思いますが、いろいろありました。それだけに今のお話を聞かせてもらって、「よくやったな」と思って私は感心しているんです。なぜかと言いますと、私どもと筑波の学園都市をつくっているときに、関西の問題が出てまいりました。そして、あざけり笑ったものです。「こんなもんができるもんか、政府の力がなくって」ってね。あの筑波をつくるとき、閣僚全部――政府のプロジェクトとしてやったんで、文部省とか科学技術庁といった一つの省じゃないんです。それにものすごい巨額の金が動きました。関西のやつは、お金も頼らないで、本当にできるんだろうか……という意味で、もう、あざけり笑ったという経験がございます。

これからも、先生の話を聞いていると、これからも民間のサポートでやろうということですが、本当にできますでしょうか。（笑い）

河　野　世の中の潮流を見ていると、これはできるような気がします。

大　饗　もしそれだったら、これは非常に結構なことです。

河　野　それから、今は日本だけに寄付依存をしているが、これがさっき言いましたように、東西の接点とか後進国の方も学者も入って一緒に研究する形をとります。そうすると韓国からの資本をもろたらいかんということないんです。

大　饗　これは完全に私立でいくわけですね。国立とかいうものは何もうたわないでね。

河　野　はい、そうです。財団法人国際高等研究所でございます。そして官――京大の先生方に、文部省の了解のもとにいろいろお手伝いしてもらったりしています。そしてそれをできるだけ輪番制

で、固定しないように、プロジェクトごとにチームを組んで、そのプロジェクトの研究が終わったら解散と。こういう形の学者村が、常に流動的なものでやっていこうということです。だから、固定しないわけです。

ですから、実験とかいうものを余りやらずに、基礎的なものをやろうというわけで、範囲は狭められますけどもね。しかし、いろいろと今までの文・理学際的な総合研究が、これからは実るし、実るはずだし、特に生命科学の領域へどんどん学問が入っていくときに、発想的には、ヨーロッパ人だけで考える発想のカベが破れるような新しいものが出てくるのじゃないか。

この間も福井先生が東京のシンポジウムで基礎講演なさいました。私が聞いておりましたら、福井先生は「特殊と普遍」ということで、「普遍」という言葉を最後まで意識的にお使いになりませなんだ。「特殊と一般化」という言葉でした。どうも日本人の感覚として、特殊と普遍というと、普遍の方が上といった上下関係でとらえるんだが、先生は「生命そのものも特殊だと思う」と言い切られ、余り生命の実態をずたずたに離したら、もう一ぺん組み立てられんのと同じように、リアルから遠ざかるんではないかという趣旨のお話でした。

やはり、生命的な科学の領域に入れば入るほど、ソフトに入れば入るほど、日本的な考え方・発想の方が、むしろ、ヨーロッパの方々の発想より、非常になじみやすい分が出てくる可能性が、ないとは言えないんじゃないか。このようなことが、私らシロウトから見ていてもわかるように思うんです。

司　会　どうも長時間ありがとうございました。

（拍手）

1990年7月31日

編集
発行 日本工学アカデミー

〒140 東京都品川区大井1-49-15
住友生命大井町ビル8F
TEL. 03-777-2941
FAX. 03-777-4941